

英語教員養成課程における アクティブラーニング型オンライン授業の可能性

—「動機減退を引き起こす教師要因」をテーマとした事例—

On the possibility of active learning-based online class in English teacher training programs:
The case of demotivating teacher factors

森本 俊

Shun Morimoto

1. はじめに

1.1 外国語学習における動機づけ及び動機減退

動機づけ (motivation) は外国語学習の原動力であり、学習のあり方や成否を決定する要因の一つである (Dörnyei, 2008; Dörnyei & Ushioda, 2011; Gardner & Lambert, 1972)。これまで、動機づけに関する先行研究は数多く行われてきたが、主な知見として、(1) 動機づけは静的な (static) ものではなく、個人内において身体的、心理的、環境的な様々な要因によって変動する動的な (dynamic) なものであること、(2) 学習者の内発的動機づけ (intrinsic motivation) をいかに高めるかが教師にとって重要な課題になること、が挙げられる。(2) の内発的動機づけは、外発的動機づけ (extrinsic motivation) と対比される概念であるが、試験や報酬といった外的な要因に支えられたものではなく、学習行為そのものに喜びや充実感を得ることで学習者の内側から生まれる動機づけである (Deci & Ryan, 1985)。

これまでの外国語教育研究では、Dörnyei (2008) の動機づけ戦略 (motivational strategies) に代表されるように、学習者の動機づけをいかに高めるかが主たる関心事となってきた。そして近年、動機づけ研究において注目されているのが、動機減退 (demotivation) という概念である。動機減退とは、何らかの理由によって学習者の学習に対する動機づけが減退する現象を指し、先行研究においてそれをもたらす要因が明らかとなってきた (菊池, 2015; Kikuchi & Sakai, 2009; Sakai & Kikuchi, 2009; 森本, 2021)。その一つとして挙げられるのが、教師要因 (teacher factors) である。教師要因とは、教師自身の身なりや言動、授業スタイル、コミュニケーションスタイルなど様々な下位要素から成る概念であり、これらの要素が絡み合っ

て学習者の英語学習に対する動機を減退させることが報告されている。

大学の英語教員養成課程では、「英語科指導法」や「教育実習 (事前指導)」等の授業を通して英語指導力の向上が図られるが、概して実践的な指導技術に割かれる時間が多く、英語学習に関する理論的な知識の学修に充てられる時間は限られている。動機づけに関する理論を取り扱う場合、時間的な制約から上述した「教師がいかに学習者の動機づけを高めることができるか」という視点からの内容に留まらざるを得ないことが多く、動機減退について深く取り扱う余裕が無いのが現状である。しかし、動機づけと動機減退は表裏一体の関係にあることや、学生たちが将来教壇に立った際、どのような教師要因が児童・生徒のやる気を削いでしまうのかを知っていることにより、自己省察の有益な視点を得ることができるはずである。

以上の背景を踏まえ、本実践報告では動機減退に焦点をおいた授業を実践し、英語教員養成課程の学生がその内容に対してどのような反応をするのかを検証したい。

1.2 オンライン授業の現状と課題

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の拡大により、各大学はオンライン授業への対応を迫られることとなった。本学においても、ZoomやTeams等を活用した双方向型授業やオンデマンド型の授業など、様々な形態のオンライン授業が展開されている。オンライン授業を実践する上で課題となるのが、いかに学修の質を担保し、主体的・対話的で深い学び（アクティブラーニング）を実現するかである。本実践報告を通して、この点に関する更なる知見を提供したい。

1.3 実践の目的

以上を踏まえ、本稿では以下の2点に焦点を当てて実践報告を行う。

- (1) 英語教員養成課程の学生は、動機減退に関する学修内容に対してどのような反応をするのか。
- (2) 同学生は、ICTを活用したアクティブラーニング型オンライン授業に対してどのような反応をするのか。

2. 実践概要

2.1 参加者

本実践の参加者は、筆者が担当する「Studies in ELT」の授業を2021年度春semesterに受講した、玉川大学文学部英語教育学科3年生33名であった（男子：20名、女子：13名）。受講生は全員英語教員養成コースに所属し、教職課程の受講者であった。

2.2 授業内容

本授業はカリキュラム上、留学振替科目としての位置づけであるが、新型コロナウイルス感染症の拡大により3年生の留学が中止となったため、学科の専任教員が担当することとなった。選択必修科目という位置づけから、15回全てがZoomによるオンライン授業であった。本科目は4単位であるため、筆者ともう1名

表1 本時の流れ

授 業 前	<ul style="list-style-type: none">・動機減退に繋がる教師要因に関して大学生170名が記述した文章を計5つのファイル（資料1～5）に分割してBlackboard（以下Bb）にアップする。・グループ編成を行い（4人×2グループ、5人×5グループ）、ブレイクアウトセッションのRoom番号（Room1～7）及び担当資料番号を含めた名簿をBbにアップする。・Google Document¹⁾を7つ作成し（Room1～7）、Bb上にRoomごとのURLリンクを張る。Google Documentでは、URLリンクを知っている者全員を「編集者」として設定する。
導 入 (10分)	<ul style="list-style-type: none">・PPTを使って動機減退（demotivation）という概念を導入し、それを引き起こす主たる要因の一つに教師要因が挙げられることを説明する。・中学・高校時代を振り返り、自身の英語学習に対する動機づけを低下させた教師がいたかどうか、その教師にはどのような特徴があったのかを個人単位で振り返らせる。・本時の目的を提示する。
展 開 (75分)	<ul style="list-style-type: none">・グループワークの内容及び取り組み方を説明する。・それぞれのメンバーは割り当てられた資料（付録参照）を読み込み、その内容を他のメンバーと共有する。・制限時間45分以内に各グループで1つのファイルを共同で作成する（動機減退に繋がる教師要因をカテゴリーに分類し、それぞれに対して具体的な項目を挙げる）。・グループの代表者を1名選出する。・グループワーク終了後、各グループの代表者が作成したファイルを画面共有しながら全体に報告する。他のメンバーは適宜補足を行う。モデレータは教員が務める。
ま と め (15分)	<ul style="list-style-type: none">・グループワークの内容及び筆者の個人研究の成果を踏まえ、動機減退を引き起こす教師要因の主な構成要素を説明し、将来教壇に立った際、折に触れて自身の言動等が当てはまらないかどうかを省察することの重要性を指摘する。・本時の課題の提示

の学科教員が週に100分授業を1コマずつ担当した。筆者担当の授業では、英語教育に関する幅広いトピックを扱い、英語の「学び方」に焦点を当てて理論及び実践面に関する知識を修得することを目的とした。

本実践（第6回）は、2021年5月17日（月）の7・8限に実施した。授業テーマは「動機づけを減退させる教師要因」であり、教師のどのような言動や特徴が学習者の英語学習に対する動機づけを減退させるのかについて理解を深めることを目的とした。尚、第5回の授業では「英語学習における動機づけ」というテーマで動機づけ理論の学修を行った。本時の流れは表1の通りである。

本時の授業の特徴は、(1) グループのメンバーが別々の情報を持ち、それをグループで共有・精査しながら課題を遂行するというジグゾー法を採用したこと、(2) Google Documentを使った文書の共同編集作業を課したこと、の2点を通して主体的・対話的で深い学び（アクティブラーニング）を実現しようと試みたことである。共同で文書を作成する過程で情報の整理や関連付け、分類といった認知的プロセスが求められるため、思考・判断・表現力の育成にも資することが期待された。

2.3 データ収集及び分析

本授業に対する学生の評価を得るため、Google Forms²⁾を使ってアンケートを作成した。質問項目は表2の通りである。アンケートは授業終了時にBbに提示し、授業時間外に回答するよう求めた。アンケートへの回答は任意であり、個人情報は一切公開されないこと及び回答内容が成績評価に一切影響を与えない旨を説明し、全員からの同意を得た。アンケートの所要時間は約20分であった。結果の分析はGoogle Forms上に保存された回答データをもとに、Microsoft EXCELを使って行った。

表2 アンケートの質問項目

No.	質問項目	回答形式
①	本時の授業内容（動機減退を引き起こす教師要因）は興味深かった／面白かった	「全く同意しない」～「強く同意する」までの5件法
②	本時の授業内容は教職を目指す上で有意義だった	「全く同意しない」～「強く同意する」までの5件法
③	本時の授業形式（Google Documentを使った共同編集）は興味深かった／面白かった	「全く同意しない」～「強く同意する」までの5件法
④	本授業以前にGoogle Documentを使った共同編集の学修を経験したことはありましたか	「あった」「なかった」「その他」の中から1つ選択
⑤	グループ別作業の取り組み方に関する指示は分かりやすかった	「全く同意しない」～「強く同意する」までの5件法
⑥	グループ別作業は取り組みやすかった	「全く同意しない」～「強く同意する」までの5件法
⑦	グループ別作業の時間はどうでしたか	「短すぎた」～「長すぎた」までの5件法
⑧	グループのメンバー数（4～5人）はどうでしたか	「少なすぎた」～「多すぎた」までの5件法
⑨	本時の授業形式（Google Documentを使った共同編集）を将来教壇に立った際に使ってみたい	「全く同意しない」～「強く同意する」までの5件法
⑩	本時の「授業形式」（Google Documentを使った共同編集）に関する感想や意見、良かった点・改善点等を述べてください	自由記述式
⑪	本時の授業の「内容」（動機減退を引き起こす教師要因）についての感想や意見を500字以上で述べてください。	自由記述式

3. 結果と考察

表3は、アンケートの結果をまとめたものである。

表3 アンケート結果

①本時の授業内容（動機減退を引き起こす教師要因）は興味深かった／面白かった	全く同意しない 0 (0.0%)	同意しない 0 (0.0%)	どちらでもない 1 (3.0%)	同意する 13 (39.4%)	強く同意する 19 (57.6%)
②本時の授業内容は教職を目指す上で有意義だった	全く同意しない 0 (0.0%)	同意しない 0 (0.0%)	どちらでもない 0 (0.0%)	同意する 13 (39.4%)	強く同意する 20 (60.6%)
③本時の授業形式（Google Documentを使った共同編集）は興味深かった／面白かった	全く同意しない 0 (0.0%)	同意しない 0 (0.0%)	どちらでもない 2 (6.1%)	同意する 15 (45.5%)	強く同意する 17 (51.5%)
④本授業以前にGoogle Documentを使った共同編集の学修を経験したことはありましたか	なかった 12 (36.4%)	あった 19 (57.6%)	その他 2 (6.0%)		
⑤グループ別作業の取り組み方に関する指示は分かりやすかった	全く同意しない 0 (0.0%)	同意しない 0 (0.0%)	どちらでもない 1 (3.0%)	同意する 18 (54.6%)	強く同意する 14 (42.4%)
⑥グループ別作業は取り組みやすかった	全く同意しない 0 (0.0%)	同意しない 0 (0.0%)	どちらでもない 0 (0.0%)	同意する 16 (48.5%)	強く同意する 17 (51.5%)
⑦グループ別作業の時間はどうでしたか	短すぎた 0 (0.0%)	やや短かった 3 (9.1%)	ちょうどよかった 22 (66.7%)	やや長かった 8 (24.2%)	長すぎた 0 (0.0%)
⑧グループのメンバー数（4～5人）はどうでしたか	少なすぎた 0 (0.0%)	やや少なかった 0 (0.0%)	ちょうどよかった 31 (93.9%)	やや多かった 3 (9.1%)	多すぎた 0 (0.0%)
⑨本時の授業形式（Google Documentを使った共同編集）を将来教壇に立った際に使ってみたい	全く同意しない 0 (0.0%)	同意しない 0 (0.0%)	どちらでもない 5 (15.2%)	同意する 19 (57.6%)	強く同意する 9 (27.3%)

①については、「強く同意する」が19名（57.6%）、「同意する」が13名（39.4%）であり、97%の学生が授業内容を興味深く感じたことが示された。授業内容が教職を目指す上でどの程度有意義であったのかを尋ねた②に対しては、「強く同意する」が20名（60.6%）、「同意する」が13名（39.4%）であり、「全く同意しない」から「どちらでもない」を選択した学生はいなかった。ここから、本時の内容が教職へ向けた学修に資するものであったことが示唆される。

③はGoogle Documentを活用した文書の共同編集という、本時の授業形式に関する質問であった。「強く同意する」が17名（51.5%）、「同意する」が15名（45.5%）であり、両者を合わせて93.9%の学生が興味深かったまたは面白いと感じたことが示された。自由記述式の⑩の回答の中にも、「何かホワイトボードを囲みながらの授業に似た感覚を覚えた。オンライン授業の中では最もリアルタイムで出席するメリットを感じた」や「Google Documentを使用したのは今回の授業が初めてだったが、他のメンバーと同時に意見を同じところに書きこめるのが面白かった。また、そのときに他者の意見が見ることができるので、自分と同じ考えを持っている人や自分が気がつかなかった意見を授業のそのときに見ることができてダイレクトに学ぶことができたと思う」といった感想が寄せられた（いずれも原文ママ）。

④については、「あった」が19名（57.6%）であり、過半数を超える学生がGoogle Documentを使った共同編集を経験したことが示された。「なかった」と回答した学生は12名（36.4%）であり、「その他」の回答は、「他の教員の授業でTeamsの似たようなものを使った」と「学修ではないが、共同編集を用いたことがある」という内容であった。

⑤～⑧は、グループ別作業の指示内容や取り組みやすさ、時間、人数についてそれぞれ尋ねた質問であった。指示の分かりやすさ（⑤）については、「同意する」が18名（54.6%）、「強く同意する」が14名（42.4%）となり、全体の97%の学生が分かりやすかったと評価した。取り組みやすさ（⑥）についても、「同意する」が16名（48.5%）、「強く同意する」が17名（51.5%）となり、両者を合わせると全ての学生が取り組みやすかったという評価を行った。グループ別作業の時間に関しては、本時では45分に設定したが、最も多かつ

たのが「ちょうどよかった」の22名(66.7%)であり、「やや短かった」と「やや長かった」がそれぞれ3名(9.1%)と8名(24.2%)であった。「やや長かった」という学生が全体の約4分の1を占めたものの、概ね適切な長さであったと言えるだろう。グループのメンバー数に関しては、本時では一人あたりの資料の分量が多くなならないよう4～5名とした。「ちょうどよかった」が31名(93.9%)、「やや多かった」が3名(9.1%)と、適正であったことが見て取れる。

⑨は本時の授業形式を将来教壇に立った際に使ってみたいかについて意見を問う質問であったが、「同意する」が19名(57.6%)、「強く同意する」が9名(27.3%)と、全体の84.9%が肯定的な評価を行った。GIGAスクール構想をはじめ、今後学校現場におけるICT化が進み、教師には情報通信技術の利活用に関する知識や技能が求められることとなることから、本時の授業形式が学生たちにとって貴重な経験となったことが示唆された。⑩の自由記述式の回答の中にも、「グループで何か一つの事柄に対して話し合い、資料をまとめたり、作成する際、その作業の画面を誰か一人が共有し、他のメンバーが見ることはできますが、全員で作業することはできず、一人がやっているところを他の人はただ見るだけになってしまうため、その点でGoogle Documentはグループ全員で作業できる点がとても優れていると感じました。今後、学校教育のあらゆる授業のグループ作業の際にGoogle Documentを積極的に活用していけるといいと感じました(原文ママ)」という回答が含まれており、英語の授業にとどまらず、学校でのあらゆるグループ活動において本時の形式が有効である点について気づきを得られた学生も見られた。

⑩は、本時の授業形式に関する感想や意見、良かった点・改善点等を自由記述式で述べる質問であった。回答の中で多かったのが、共同編集による作業の効率化についての言及であった。以下は主な回答である(原文ママ。下線筆者)。

- ・効率面でとても高いものだと感じました。
- ・グループ別に協働する事で同時間帯での効率的な作業を行うことが出来た。今回の場合は特に作業するにあたって同じシートで文字を打つという比較的やりやすい作業だからこそ時短で効率化出来ていたと思う。形式は斬新であり、面白かった。
- ・書記という役割を設けて1人に負担をかけるのではなく、話し合いをしながらみんなで一齐に打ち込んで進めることができたので作業が効率的になって良かった。
- ・誰もがいつでも編集できるので作業効率も良く意見も言いやすかった。
- ・全員で一齐に打ち込むことができるので、効率が良く個々への負荷も少なく、とてもやりやすかった。

以上に加え、参加者間のインフォメーション・ギャップを意図的に設けるジグゾー法に対する肯定的な意見が見られた。具体的には、全員が何らかの形で参画しなければならない作業条件であったため、グループ全体で積極的にインタラクションをしながら課題に取り組むことができたという内容であった。以下は主な回答である(原文ママ。下線筆者)。

- ・協同編集を行えることによって、何もしない人がいない点という点で有益な授業形式であると思った。他の授業で、GoogleのJamboardを使ったことがある。分類を行う活動があるのであれば、Jamboardのほうが気軽に書き込むことができ、使いやすと感じた。大体の内容をJamboardでディスカッションを進めて、それを参考にGoogle Documentでまとめるという形式ができれば、どの観点から、その結果が出たのか分かりやすくなるのではないかと考えた。
- ・一度に全員で文字を打ったり、間違っているところを編集したりできたので協力して取り組める便利な方法であると感じた。そして、それぞれが持っている資料が異なっていたため、全員が参加

をして、それぞれの役割に分けて協働作業ができたところも良いと感じた。

- ・一斉に作業することができるため、手持ちぶさたになる人がいない。
- ・共同作業を話し合いながらできるのでオンライン授業でもしっかりとグループワークができている感覚があり、個人としても授業やグループに課された問題に意欲的に取り組むことができた。
- ・全員がリアルタイムでファイルに打ち込むことができたので効率性もあり、また個々人が別々の資料を配布されていたということもあり協力してタスクをこなさなければならなかったので必然的に「サボる」行為ができない環境で画期的であった。将来的に自分も行ってみたいと強く感じた。
- ・どの学生の活動かが明確になるので、緊張感もありつつサボっている人は誰一人もいなかったので良かった。また、パワーポイントは一人が編集しなければならないので負担がかからないGoogle Documentは良かった。話し合いして発表するような授業では積極的に使ってほしい。
- ・Google Documentを使った共同編集において、グループのメンバー全員が発言を義務付けられていることが前提にあるので、いつもよりも意見の飛び交いが多かったのが良かった。
- ・全員が同じ資料を見ているわけではなく参加しないとグループに迷惑がかかるのでそのような形式にしてのグループが良かったと思う。

以上のように、全体を通して授業形式を肯定的に評価する回答が多く見られたが、問題点や課題を指摘した記述も見られた。以下は主な回答である（原文ママ。下線筆者）。

- ・皆で意見を交わし合いながらリアルタイムで作業できるのは魅力的である反面、話し合いが滞ると皆気を遣うためか作業がすべて止まってしまう。また、本時に限定したことではないが、このシステムを使うと常に作業している人とそうでない人が同じグループ内で可視化されてしまうのはマイナスな点ではないかと毎回思う。
- ・みんなで協力して作業を行っている感じが強くしました。その点が特によかったです。匿名性なのも、みんなが活発に作業する利点であると考えます。一方で、匿名によって作業を全くしない人がいる可能性もあるので、その点に関してはメリットもデメリットもあると感じました。
- ・匿名故に自分のアイコン？がどこにあるかわからなくやや使いにくかった。設定で変えられるものではないと思うが、自分の名前やイニシャル等のほうが使いやすいと感じた。
- ・協働作業は非常に効率的で何より全員が同じ画面を見ながら作業もできるというのは非常に良かった。しかしながら、今回はメンバーに恵まれていたからよかったものの、基本メンバー任せで作業をしない人も今学期何度も当たってきた。これはあくまでグループワーク全体としてだが、作業をせずブレイクアウトルームにいるだけで意見をまとめた一員になる学生については非常に邪魔と思うのが本音である。
- ・ドキュメントを完成させることにフォーカスすると、会話がする時間が圧倒的に減ってしまうと今回感じた。違う資料を与えられていることによって、最悪話し合わなくても記入できてしまう。
- ・ZoomとGoogle Documentを同時に操作するのは、インターネットにやや負荷がかかり、2度回線が切れてしまった。なので、やや使いにくかった。

以上の回答に見られる問題点・課題は、「匿名性」と「フリーライダーの存在」、「ネットへの負荷」の3点にまとめることができる。匿名性については、図1のように各学生に「匿名ジャッカル」や「匿名パンダ」といった名前が自動的に割り振られるため、本人が口頭で伝える場合を除き、メンバー間で誰がどの名前なのかを知ることができない。上記コメントのように、名前が可視化されるがためにやっている人とやっていない人が明らかになるといったデメリットがある一方、「誰が記入しているのが分からないので、普段意見

を言うことを躊躇しがちな人でも気軽に意見を共有できること」(原文ママ)という意見もあり、匿名性に関してはメリットとデメリットの両面が存在することが分かる。



図1 共同編集の作業画面

ジグゾー法を活用した文書の共同編集という学修活動は、自ら努力をせず他の学生の努力にただ乗りする、いわゆる「フリーライダー」の出現を抑止することを意図してデザインした。学生からのコメントには実際にそのような者が本時に出現したという記述は見られなかったが、出現する可能性があることを示唆するものが複数見られた。この点に対しては、グループワークにおいてはフリーライダーが出現する可能性があることを学生に周知し、出た場合にどのように対応するのかというソーシャルスキルを指導することが求められるだろう。

最後に、本実践ではZoomとGoogle Documentを併用する形になったため、一部の学生において通信環境への負荷がかかったことが報告された。今回は全員がPCを通して参加していたが、タブレット端末を使用した場合にスムーズに作業を行うことができるかという点や、多くの学生が同じ場所で活動した場合に安定した通信環境を確保することができるかなど、技術面での留意が必要である。

⑩は、「動機減退を引き起こす教師要因」という学修内容に対して学生たちがどのような感想をもったのかを問うた質問である。以下は主な回答である(原文ママ)。

- ・モチベーションを上げるのにも下げるのにも教師が一枚噛んでしまうという責任の大きさを改めて実感した。それと同時に、それをすべて客観視して自分がモチベーションを上げられるような教師であるのかどうかを判断するのはとても難しいように感じた。
- ・自分が想像していたよりも生徒は教師のことをしっかり見ており、教師の生徒に与える影響がとても大きいことが分かったと同時に、それは衝撃的なものでした。
- ・資料を一通り読んでいて、やはり教員はその専門とする科目をはじめ、人間的な部分でも生徒の手本となることがとても重要なのだということに気が付きました。
- ・今回の授業では、教師になるにあたって、生徒の授業における取り組みやモチベーションの向上、保持が授業の組み立てにより求められる能力である一方で、一步間違えれば生徒のやる気を削いでしまう原因になってしまう事を再認識することが出来た。
- ・Demotivating Teacherが反面教師となって、そのような生徒のモチベーションを下げさせない教師に

なるためには、まずは自分の目指す教師像をしっかり持つこと、そして、生徒に真摯に向き合う気持ちを忘れてはならないと考える。しかし、生徒によく思われたいから褒める、怒らないではなくて、場面状況や生徒の気持ちを把握して時に一緒に喜んだり、悲しんだり、適切な指導を行える教師を目指したいと思う。

- ・教員を志す一人としてこのような教師が未だにどの学校でもいた事実が衝撃的であり、反面教師としていく必要があると感じられた。今回の動機減退を引き起こす教師の特徴は英語の教師だけとは言えないが、教師は英語学習者である生徒達にとっては身近なロールモデルであり、大きな影響を与えることは確かだ。したがって動機減退を引き起こさないためにどのように生徒と向き合うか、授業を進行するかを慎重に考え今後の生徒のモチベーションを維持、向上を図る取り組みをしていかななくてはならない。
- ・生徒に愛情をもって、心の底から理解してもらいたいと思う気持ちが、生徒のモチベーションを保ち、理解を深めるのだと思う。
- ・今回の授業を通して、英語を教える面だけでなく、日常的な部分や容姿などに関する部分も教師になるうえで重要なことであることが分かった。また、自分が思っている以上に生徒は教師を見ているという自覚をもち、行動しなければならぬと感じた。
- ・教師の良い影響を受けたため、我々は英語に対する学びの大切さや楽しさを気づくことができ、英語を専攻しているのではないかと私は考えた。そのため、授業の内容と自分の経験を通して、教師は言動や行動が生徒の学習と学習意欲や態度、モチベーションに大きく影響することを意識して責任を持つべきであると考えた。

本時で使用した資料は、大学生が実際に経験した英語教師に関する具体的な記述であったため、学生にとって一見信じがたい、衝撃的な内容が多く含まれていたことが推察される。児童・生徒がいかにか教師の一挙手一投足を見ているかについて驚きを示した学生も見られた。グループワークを通して考察を深める中で、教師のどのような特性や言動が児童・生徒の動機づけを減退させるのかを理解し、教師の責任の重さを再認識することができたようである。また、個々の教師要因に対する理解に加えて、教師を志す上で今後どのようなことに留意すべきかや、どのような教師を目指すべきなのかについて言及する学生も多く見られた。以上を総合すると、動機減退を引き起こす教師要因は英語教員養成課程の学生たちにとって有意義な学修内容であったことが示唆された。

4. まとめ

本稿では、英語教員養成課程の学生が(1)動機減退という学修内容に対してどのような反応をし、(2)ICTを活用したアクティブラーニング型オンライン授業をどのように評価するのか、の2点に着目して実践報告を行った。前者については、アンケートの質問①、②、⑩への回答を通して、大多数の学生にとって興味深く、教職を志す上で有益な内容であったことが示唆された。教師は往々にして授業内容や方法に意識が向いてしまう傾向があるが、児童・生徒とのコミュニケーションの取り方や人間性といった要因が英語学習に対する動機づけを減退させることに気が付くことができたのは、学生にとって大きな収穫であったと言える。本授業では、15回中2回を動機づけに関する学修に充てることができたが、他の学修項目とのバランスを取りながら、今後も可能な限り扱う機会を確保することが求められる。

後者については、全体的な満足度は高く、ジグソー法やGoogle Documentを活用したアクティブラーニング型オンライン授業を通して積極的な授業参加及び学修内容の深い理解を図ることができたことが示唆された。本実践で得られた知見を踏まえ、これからの本学における英語教員養成課程の更なる充実化を図って

いきたい。

【注】

- 1) Google Documentとは、Googleが無償提供している文書作成ツールである。クラウド上で文書を作成するため、複数人での共同作成や共有が容易にできる。
- 2) Google Formsとは、Googleが無償提供しているWebアンケート作成ツールである。入力された回答は自動集計され、csv. ファイルをダウンロードすることができる。

【引用文献】

- 菊池恵太『英語学習動機の減退要因の探求—日本人学習者の調査を中心に』東京：ひつじ書房、2015年。
- 森本俊「計量テキスト分析を用いた学習者の動機づけを減退させる英語教師要因の研究」『論叢：玉川大学文学部紀要』第61号、2021年、1-26ページ。
- Deci, E., & Ryan, R. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. New York: Plenum.
- Dörnyei, Z. (2008). *Motivational strategies in the language classroom*. Ernst Klett Sprachen.
- Dörnyei, Z., & Ushioda, E. (2011). *Teaching and researching motivation (2nd ed)*. Harlow, UK: Longman.
- Gardner, R. C., & Lambert, W. E. (1972). *Attitudes and motivation in second language learning*. Rowley, MA: Newbury House.
- Kikuchi, K., & Sakai, H. (2009). Japanese learners' demotivation to study English: A survey study. *JALT Journal*, 31(2), 183-204.
- Sakai, H., & Kikuchi, K. (2009). An analysis of demotivators in the ELF classroom. *System*, 37, 57-69.

【付録】 学生に配布した資料の記載内容例

No. 1

●中学生の時の英語の先生（男性）

3年間ずっとこの先生だったのですが、言葉が悪く、問題を解けなかったり、テストの点数が低かったりするとバカにしてくる方でやる気が低下しました。授業の時も発言して間違えると笑ってきて、授業を受けるのも嫌でした。

No. 2

●中学3年か2年の時の当時30代後半だった男の先生

現在完了を新しく勉強し始めて、まだ何も勉強してないけど予想・予測でいいからsinceとforの違いを考えてみようっていう授業で当てられてsinceの意味を予想して答えたらみんな（クラス）の前で「ばっかじゃねーの！ぶぶー！違いまーす！」って言われた時にその先生のせいで英語まで嫌いになりそうだった。その先生は生徒を下げて、けなして伸ばそうとする感じの人だったから他のクラスメイトにも上記のようなテンションで間違えた時はすごくバカにしてくる人だった。バカにされて悔しいと思って頑張るってやる！って思える人ならこの先生でもいいと思うけど、自分はそうじゃなくてバカにされてみんなの前であんなことを言われてイライラしかなかったし、全然勉強頑張ろうって思えなかった。その先生だけじゃなく英語まで嫌いになりそうだった。

No. 3

●高校3年生の時の60歳の男性英語教諭

具体的な文法の説明をしなくて、覚えるとしか言われなかったからだ。さらに、文章問題を解いた

後、解説をしてくれなく、解答しか言ってくれなかった。授業の後、間違った問題をなぜ間違っていたのか聞くと、「自分で考えろ」としか言わなかった。このような理由で、私は英語学習に対するやる気が低下し、成績が悪くなってしまった。

No. 14

●高校1年生の時の男性教員

もっと上の学年で習うような内容を授業で教えたりしてきて、基礎もあまり固まっていないままだったので訳も分からず、授業のたびに頭を抱えていました。指名された時に答えられないと必ず怒るような人で、学年に合わせた授業もしてくれないのに怒らないで欲しいと思っていました。こんな風に、授業がハイレベルすぎるのと、常に怒られるかもと怯えてきたのが目立ったので、やる気が低下しました。

No. 33

●高校3年生の時のコミュニケーション英語Ⅲ担当45歳くらいの女性教員

その先生は、教科書を主に扱い、全て受け身の授業で非常に退屈だった。主に教科書を開かせ、1文1文を生徒を指し、発音させ、訳させるだけの流れだった。グループワークやペア学習もなかった。重要な文法や単語を教科書から抜き出し、黒板に書き説明して次という形であった。そして、予習をしてもらうことが前提であったが、してこない生徒には「次からきちんと予習してきてね」の一言のみで、当てられた生徒が言うはずであった訳をよく予習をしてもらう生徒に当てて次に進むという授業だった。

No. 65

●英語は誰でもできる、簡単だと言っていた人がいた。そのように言うことでハードルを下げようとしているのかもしれないが、苦手な人から見れば「こんな誰でもできる簡単なことができないのか」という、英語への諦めを促しているようにしか思えない。

No. 81

●高校の時の先生

生徒が英語に関して何か挑戦しようとする、「君には無理だよ」と言ってきました。あまり協力もしてくれませんでした。

No. 133

●ただひたすら黒板に英文を写し続け、たまに読ませるが、それ以外はずっと生徒を静かにさせていた。あと、生徒の質問は一応聞くが、特に明確な答えを出さずにそのまま授業を続けていた。アドバイスや冗談などもあってのほかで、いつも生徒を静かにさせていて、実際その人の授業は最悪、クラスの3分の1が爆睡状態だった。